

えりも町悲恋沼からメダカの個体群を確認

山川 雄 大 1)

1. はじめに

ダツ目メダカ科の淡水魚であるメダカ *Orizyas latipes* (Temminck et Schlegel) は日本では本州・四国・九州に広く分布し、古来からよく知られた種類であるが、北海道には自然分布はせず、全国的にもよく知られた函館市の個体群と、小林・大滝 (1967) が報告していた室蘭市の個体群はともに人為的分布であり、北海道ではそれ以外にはメダカの生息域はなく、「メダカ」がいるとされている地域でもその全てが他の魚種の稚魚であることが判明しているが、著者はえりも町の悲恋沼でメダカの個体群の生息を確認しているので報告する。

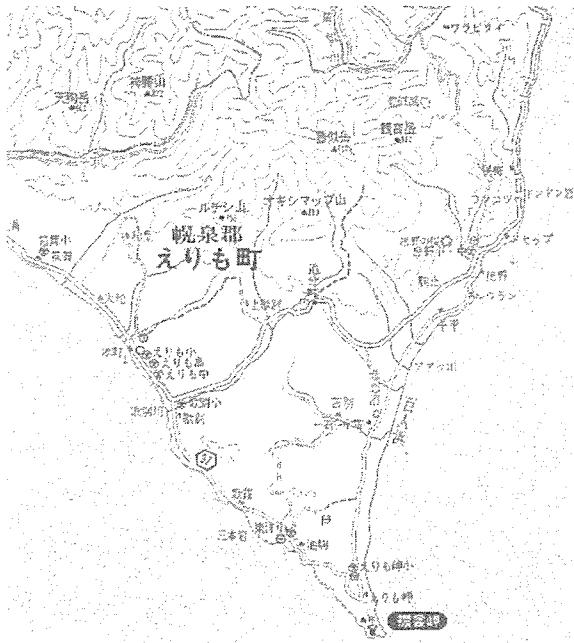


図1. 悲恋沼の位置

(『地図使用承認©昭文社第11E050号』)

2. 生息状況

2008年8月5日10時30分頃(天候・晴)、幌泉郡えりも町悲恋沼の南東の岸近くの水深の浅い地点

で、小型の魚類が少数で群泳しているのを目撃。当地で魚影を認めたのは初めてであり、うち肌色の個体まで認められたので一瞬目を疑ったが、手網で捕獲して確認するとそれらは意外にもメダカであり、しかもオレンジ色の所謂ヒメダカまで認められた(ヒメダカは遠目には、或いは角度によって肌色に見える)。当日全部で25尾採捕したが、うち4尾はヒメダカであった。

悲恋沼で捕獲した個体は75%エタノールで固定し、標本は筆者が保管している。何れの個体も小振りで、特別に変わった特徴は見られない。



写真1. 悲恋沼

3. 現地の環境と生物相

メダカの生息が確認された悲恋沼はえりも町百人浜に位置する淡水池沼で、面積は2k㎡、周囲380m、最大水深は0.7mといわれ、底質は砂底及び砂泥底。水生植物は全く乏しく、湖岸にアシ *Phragmites communis* Trin などわずかな抽水植物が見られる程度で、生息する水生動物もエゾイトトンボ *Coenagrion lanceolatum* Selys の幼虫や、ミズカマキリ *Ranatra chinensis* Mayr、マツモムシ *Notonecta triguttata* Motschulsky、マルタニシ *Cypangopardina chinensis laeta* (Maratens)、オ

1) 遠軽高等学校 〒099-0414 北海道紋別郡遠軽町南町1

オタニシ *C.japonica* (Maratens)、ニホンアマガエル *Hyla japonica* Günther の幼生のほか、水面にはミヤマミズスマシ *Gyrinus reticulatus* Brinck やヒメアメンボ *Gerris latiabdominis* Miyamoto が見られるが、いずれも個体数は多くない（このほかオオゲンゴロウ *Cybister japonicus* Sharp の生息も確認されている）。成因については海跡湖ともいわれるが、細流が砂丘によりせき止められて形成された堰止湖の可能性もある。同沼の水は地下水脈などにより太平洋方向に流出しているが（水位上昇時には末端から流下）、少なくとも悲恋沼ではこれまでに魚類の生息は全く確認されておらず、湖沼としては狭小で閉鎖的な水域であり、冬季に至っては完全結氷することもあって魚類の生息、まして定着には酷烈過ぎる環境と見なされ、筆者自身もメダカはおろか当地における魚類の生息を予測したことはなかった。

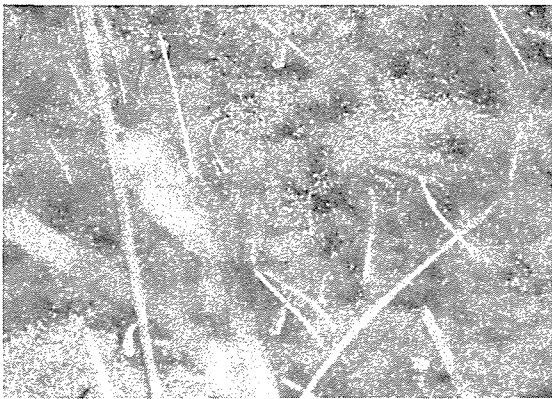


写真2. 採集地点と生息個体 (2008年8月5日)

4. 悲恋沼におけるメダカの移入経路

悲恋沼のメダカ個体群が自然分布であることは考えられず、しかもヒメダカが少なからず見られることからこれら由来は完全に人為に因るもので、何かの機会に放流されたことは確かである。えりも町郷土資料館の中岡利泰氏によると、売れ残って始末に困った個体が放流された可能性があるとのことであったが、その線が最も信憑性のある経路であろう。

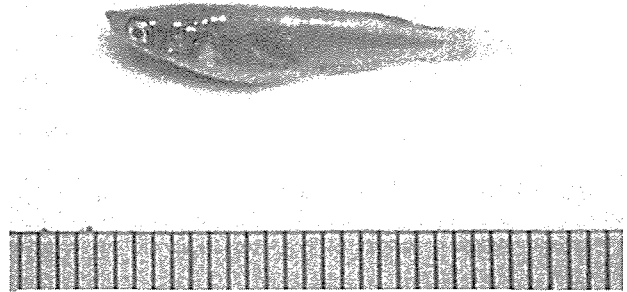


写真3. 悲恋沼産メダカ (2008年8月5日)

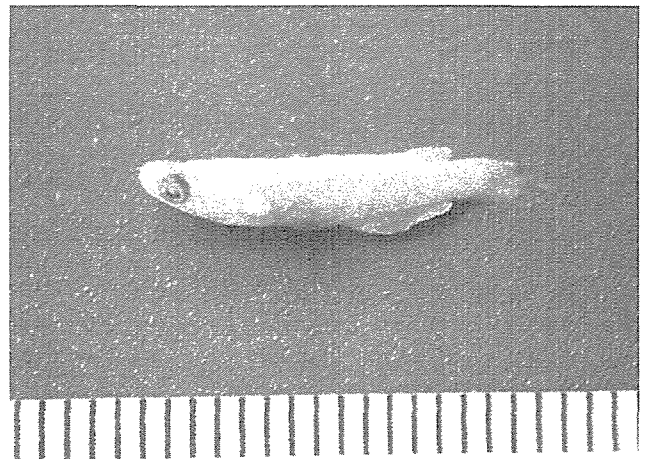


写真4. 悲恋沼産ヒメダカ (酒精漬)

5. その後の道内のメダカ個体群の動向

先に言及した道内のメダカ個体群のうち、室蘭市の個体群は生息域である知利別町の湿地が宅地化などで消滅したことによりすでに絶滅した模様である。函館市の個体群については近年新たな情報は入っていないが、現在おたる水族館で飼育展示されている個体はこれらの子孫だとのことである。その他の道内の他地域からは現在のところメダカの生息に関する新たな情報はない。

6. えりも町のメダカの動向と今後の可能性

えりも町の悲恋沼のメダカについては、その後筆者は調査は行っていないが、中岡氏によると、現在でも依然生息が認められ、さらに悲恋沼の水位上昇時に末端から流下して東側の沿岸池沼群にも生息圏

を広げているとのことである。メダカの寿命は約1年、稀に2年であるのに、その後の生息が認められているのは、少なくとも悲恋沼では世代交代が行われていることは疑いなく、当地の環境自体メダカにとって過酷であると考えられただけにいささか意外であった。

えりも町周辺には固よりメダカは自然分布しないため、本州以南のように在来個体群の遺伝子攪乱が発生する可能性はない。また悲恋沼ではメダカと競合するような関係にある種類も特になく、メダカ自体在来種を圧迫する可能性も特に考えられず、トンボ類の幼虫やミズカマキリ、マツモムシ、オオゲンゴロウなどの捕食圧による個体数の抑制が予想されるため、メダカが過密になることも考えにくく、その意味では従来の生態系に及ぼす影響については危惧する必要は少ないと思われる。またえりも町の河川に放流されても、同町河川群自体メダカが生息可能な環境ではないことから、定着する可能性もほとんどない。しかし何れにせよ、メダカはえりも町には「分布しない種」であるはずで、今回の移入によってメダカの分布が広がったなどと錯覚してはいけない。もし今後予想外の増殖を見る場合は、人為的に個体数を抑制する必要がある。また、他の外来種を悲恋沼に放流するような愚挙は厳に慎むべきである。

発表に当たり、えりも町のメダカに関する情報を提供して下さった中岡氏、悲恋沼周辺の図版引用を許可して下さった昭文社の藤江廣一郎氏に厚くお礼申し上げます。

7. 参考文献

- 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦(1976) 原色日本淡水魚類図鑑(保育社)
 稗田一俊(1985) 北海道の淡水魚(北海道新聞社)
 森 文俊・内山りゅう・山崎浩二(2000) ヤマケイポケットガイド⑰ 淡水魚(山と溪谷社)

表1. 採集個体の体位

全長 (mm)	雌 雄	備 考	全長 (mm)	雌 雄	備 考
21.9	♀		16.7	♂	ヒメダカ
20.2	♀		16.1	♀	
19.7	♂		16.0	♀	ヒメダカ
19.1	♂		約16	♂	屈曲固定
18.7	♀		15.8	♀	
18.2	♀		14.3	♀	
18.0	♀		13.5	♂	
約18	♀	屈曲固定	13.4	♂	
17.8	♀		13.3	♀	ヒメダカ
17.7	♀		12.3	♀	
17.5	♂	ヒメダカ	12.1	♀	
17.4	♀		約12	♂	脊柱側彎
約17	♀	屈曲固定			

- 佐原雄二(2001) 改訂版・山溪カラー名鑑 日本の淡水魚(山と溪谷社)
 森 文俊・内山りゅう(2006) 新装版・山溪フィールドブックス2 淡水魚(山と溪谷社)
 尼岡邦夫・仲谷一宏・矢部 衛(2011) 北海道の全魚類図鑑(北海道新聞社)
 前田憲男・松井正文(1989) 日本カエル図鑑(文一総合出版)
 徳田龍弘(2011) 北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑(北海道新聞社)

- 広瀬良宏・伊藤 智・横山 透(2007) 北海道のトンボ図鑑 (いかだ社)
- 林 正美・宮本正一 (川合禎次・谷田一三編) (2005) 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 (東海大学出版会)
- 奥谷喬司 (編・監修) (2004) 改訂新版・世界文化生物大図鑑 貝類 (世界文化社)
- 前川光司・後藤 晃(1982) 川の魚たちの歴史 (中央公論社)
- 岩松鷹司 (2002) メダカと日本人 (青弓社)
- 内山りゅう (編) 佐原雄二・市川憲平ほか (2007) ヤマケイ情報箱 今、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち (山と溪谷社)
- 大滝末男・石戸 忠 (1980) 日本水生植物図鑑 (北隆館)
- 小林 弘・大滝紀夫 (1967) 室蘭に生息するメダカについて. 生物教材 (5) : 11-14.
- 山川雄大(2003) 北海道えりも町におけるオオゲンゴロウの記録. *Sylvicola*(21):93.